

## 27.自閉症スペクトラム障害児と同年齢定型発達児の自画像描写における比較と検討

海部 忍<sup>1,2)</sup>, 横野 志帆<sup>1)</sup>, 宮本 省三<sup>3)</sup>, 椛 秀人<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup> 鴨島病院リハビリテーション部, <sup>2)</sup> 高知大学大学院医学系研究科, <sup>3)</sup> 高知医療学院, <sup>4)</sup> 高知大学医学部第一生理学講座

### 【はじめに】

自閉症スペクトラム障害児の中には感覚認知の偏倚, 運動コントロールの障害など身体的側面の問題を持ち合わせている児も少なくない. そこで, 自画像の描写を通して, 自閉症スペクトラム障害児が自己の身体をどのように認知できているのかを検討すると共に, 同年齢の定型発達児が描写した自画像と比較および検討した.

### 【対象および方法】

対象は自閉症スペクトラム障害と診断された男児2名(児1:86ヶ月, 児2:96ヶ月;以下 ASD)と同年齢の定型発達児2名(児3:82ヶ月, 児4:94ヶ月;以下 control)とした. ASDの精神発達評価として乳幼児精神発達診断法の運動項目にて児1は54ヶ月, 児2は42ヶ月であった. 課題は対象者に「自分の頭から足先まで全身を描いてください.」と教示し, A4用紙に鉛筆で全身の自画像を描いてもらった. 描写された自画像はグットイナフ人物画知能検査(以下; DAM)を用いて点数化した.

### 【説明と同意】

本研究にあたり, 対象者およびその保護者には口頭と紙面にて説明を行い, 同意を得た上で実施した.

### 【結果】

ASDの自画像はDAMにおいて児1:10点, 児2:7点であり自画像から換算される精神年齢(以下; MA)は児1:4歳10ヶ月と児2:4歳1ヶ月であった. Controlの自画像は児3:25点, 児4:21点であり, 自画像から換算されるMAは児3:7歳9ヶ月, 児4:7歳1ヶ月であった. 描写の具体性としてcontrolの自画像は頭部から指先(5本の手指)および足先まで描写されており, 生活年齢(以下; CA)やMAに差が見られない描写をしていた. それに対しASDの自画像は体幹部が描写されていない, 身体部位の位置関係が不十分な写実であり, 身体イメージの構築における問題が描写にて確認できた.

### 【考察】

人物像の描写において田中ら（2003）は4歳児で頭部を大きく描写する特徴があり、5歳児になると頭部の大きさは全体像に対してバランスよく、身体部位の詳細も描く事が可能となり、ボディイメージの発達段階を反映しているとしている。今回、自画像描写を試みた定型発達児が自画像から換算される MA と CA とに大きな差が認められないのに対し、ASD では自画像から換算される MA と CA に差が生じていた。また、ASD においては自画像から換算される MA と乳幼児精神発達診断法の運動項目の点数は共に CA より低く、今回描写を行った ASD は CA に対し自己の身体イメージが未発達であり、運動学習の遅れに影響を及ぼしていると推測される。本結果は ASD における自画像描写が児の身体イメージをどのように認知しているのか検討する上で有用であり、リハビリテーションにおいては言語的な記述も含め、内的世界の構築を考慮した視点が必要であると考えられる。